



— ふ ぐ る ま —

図書館だより 175号

(2012.10.1)

三郷町立図書館

三郷町勢野西1-4-4

TEL/0745(33)3030

FAX/0745(33)3188

<http://www.lib.sango.nara.jp/>

携帯電話 <http://www.lib.sango.nara.jp/mobile/>

## ペンネーム

作家のペンネームはどうして決めているのか、興味深いものがあります。故郷やゆかりの地名を使ったもの、本名をもじったもの、外国作家の名前に日本語を充てたものなどさまざまあります。もちろん本名をそのまま使っている方もあります。変わっているので有名なのが二葉亭四迷でしょうか。また、プロフィールを公開しない覆面作家や複数人によるペンネームなどは推理作家によく見られます。ペンネームに作家のいろんな思いがこもっているようです。



## 図書館カレンダー

### 10月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

### 11月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

開館時間:午前9時30分～午後7時(日曜日は午後5時まで)



### 【休館日】

- ・ 毎週水曜日
- ・ 10月1日(月) — 館内整理日
- ・ 10月8日(月) — 体育の日
- ・ 11月3日(土) — 文化の日
- ・ 11月5日(月) — 館内整理日
- ・ 11月23日(金) — 勤労感謝の日



# グリム童話

今から 200 年前、1812 年ドイツで初めてグリム童話が出版されました。18 世紀ごろまで、民話やおとぎ話は大人の娯楽の一部でした。それが、読み書きのできる子どもが増えてきたことから子どもにも読めるやさしい昔話や童話が人気になり、**グリム兄弟**がドイツの民衆の間で語りつがれてきた民話を編纂して、童話集「子供と家庭のための昔話集」を 1812 年のクリスマスに出版したのです。



図書館にはたくさんの「グリム童話」があります。「赤ずきん」「白雪姫」「ヘンゼルとグレーテル」など皆さんもご存じの有名なたくさんの童話が今も世界中で子供たちに親しまれています。童話の世界を愉しみませんか？

「グリムの昔話」 1～3

児 S943 グ

「図解雑学 グリム童話」

鈴木 満

940.26 ス

「語るためのグリム童話」 1～7

児 943 グ



## グリム兄弟とは

19 世紀にドイツで活躍した言語学者・文献学者・民話収集家・文学者の兄弟。ヤーコプ・グリム（兄）は「グリムの法則」(\*)を樹立するなど、言語学の発展にも尽くし、ヴィルヘルム・グリム（弟）は文章に優れ、「ドイツ英雄伝説」といった作品も残しています。

(\*)「グリムの法則」とは、違う言語間の音韻の対応の規則

「グリム兄弟」 高橋 健二

940.26 タ



## 本当はおそろしいグリム童話

実母を処刑した白雪姫、少女を狂わせた「赤い靴」の誘惑。「マッチ売りの少女」を汚す魔の手、復讐の道具として育てられたラプンツェル、飢饉の際の子捨てが描かれた「ヘンゼルとグレーテル」…。最初の頃のグリム童話集は「語り口に飾り気がない」「話の選択や表現が子供向きでない」「あまりに残酷だ」などの批判を受け、版を重ねるたびに手を加え、第 7 版でほぼ現在の語り継がれているお話になりました。初版と現在のお話を読み比べてみるのも面白いかもしれませんね。しかし、童話の本当に意味するところとは・・・。

「本当は恐ろしいグリム童話」1・2・Deluxe 桐生 操 940.26 キ

「グリム童話のなかの怖い話」

金成 陽一

児 940 カ

「1812 初版 グリム童話」上・下

B943.6 グ



## ブックリサイクルのお知らせ



保存期間を過ぎた雑誌や寄贈図書を再利用ください。

日時： 10月28日(日)～30日(火)

28日(日) 午前10時～午後5時 (一人 5冊まで)

29日(月) 30日(火) 午前9時30分～午後5時 (冊数制限なし)

対象： 町内在住の方のみ

場所： 図書館 地下1階 会議室 3

## 本の森探検隊 表彰式

第11回「本の森探検隊」の表彰式が9月1日(土)に行われました。今年のテーマは「きつね」。いろんなきつねに出会うことができましたでしょうか。隊員のみなさん、お疲れ様でした。

第一位	澤田 遥さん	487点
第二位	守安 桃代さん	242点
第三位	守安 梨乃さん	235点
第四位	扇田 真子さん	225点
第五位	岡村 美佐樹さん	214点



## 10月の行事予定

★おはなし会 (毎週日曜日におはなしルームで行います)

今月は 7日・14日・21日・28日です。

▽小さい子ども向けのおはなし一午前10時30分～10時50分

▽大きい子ども向けのおはなし一午前11時～11時30分

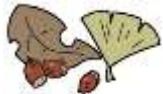


☆土曜の午後のおはなし会

27日(土)午後2時よりおはなしルームで行います。

★ブックスタート

7か月児健診対象の赤ちゃんと保護者の方は、ご参加ください。



日時 : 16日(火) 午後2時

場所 : 保健センター

☆図書館上映会 (毎週土曜日 午後2時より視聴覚室で行ないます)

6日(土)「十五才 学校IV」(2000年 120分)

監督: 山田 洋次 出演: 金井 勇太・麻実 れい

13日(土)「めまい」(1958年 128分)

監督: アルフレッド・ヒッチコック 出演: ジェームズ・スチュアート

20日(土)「流れる」(1956年 117分)

監督: 成瀬 巳喜男 出演: 山田 五十鈴・田中 絹代

27日(土)「帰郷」(1950年 104分)

監督: 大庭 秀雄 出演: 佐分利 信・木暮 実千代

★おとなのためのストーリーテリング

テーマは「竜」です。

日時 : 9日(火) 午前10時30分

場所 : 図書館1階 視聴覚室



☆フロアーコンサート

日時 : 27日(土) 午後4時～4時30分

場所 : 図書館2階 おはなしルーム前

演奏 : ギター・マンドリン・アンサンブル・ブルースカイ

★ブックリサイクル

日時 : 28日(日) 午前10時～午後5時

29日・30日(火) 午前9時30分～午後5時

場所 : 地下1階 会議室 3

☆生涯学習室開室のお知らせ

期間 : 毎週土・日と 11日(木)～18日(木) (休館日を除きます)

午前9時30分～閉館30分前まで

対象 : 町内在住の方

街を歩いていると、“くるり”と頭にスカーフを巻いたアラビア系の顔立ちの娘さんとして違うことがある。イスラム教徒だ。しかし「頭に“くるり”とスカーフを巻く衣装」とはよく考えたものと思う。それは「わたしは敬虔なイスラム教徒です」という大きな名札を胸に着けているようなものだし、紫外線よけになり肌にもいい、しかもスカーフの色や生地、刺繍の模様の工夫次第でとてもファッショナブルになりカッコイイ・・・なんて気軽に書いていると「スカーフには宗教的な意味があって、イスラム教徒の女性はオシャレで身につけているのではありませんよ」と信者の人にお叱りを受けそうだ。

今、アフリカ・中東のイスラム教のある国々が「揺れて」いる。それは初めての民主選挙だったり、内戦、外国軍の駐留、そして絶え間のないテロであったりする。だが日本の新聞を読む限り「市井のイスラム教徒とはどんな人たちで、どんな生活をしているのか」よくわからない。それは裏を返していうと、日本のマスメディアがいかにも、欧米に偏った情報を流しているか、イスラム文化圏の人びとの生活に無関心か、ということでもある。

『白い紙／サラーム』はイラン出身の作者が日本語で書いたフィクション。だがこの本に収められている二つの小説は私たちに『すぐれた文学』とは何か」という問いを、改めて突きつける。「それ」は「文法的に正確な文章の羅列」、「ある種の美談、奇談」、「現実を批判する正確なルポタージュ、新聞記事」でもない。「それ」は何だろう？

『白い紙』はイラン・イラク戦争時(1980-1988)の、これらの国の国境近くにあるイランの小さな村がモデルと思われる。圧倒的な軍事力の敵に対し劣勢に立ち、首都テヘランの空襲と国内侵入に耐えられなくなったイラン政府は、国内の中学・高校生を徴兵し戦わせる。医大に進学して医者になろうとする少年の夢が、戦争のため、はかなく破れていく非情な現実。その少年に淡い恋心を抱く少女の痛烈な悲しみが、リアルに描かれている。

『サラーム』はアフガニスタンからやってきた難民の少女の物語。彼女は日本で難民の認定を受けられず入国管理局（という収容所）に閉じ込められ、日本人有志の尽力でそこから一度出られる。が、奇しくもその時9・11テロが起こり、「彼女がアフガンから来た」というただそれだけの理由で、タリバンの暴力が猛威を振るうアフガニスタンに無条件に強制送還されてしまう。（これは小説だが似たような話は奈良にもあった）。

異常なこと、扇情的なことを書いている本・小説はいくらでもある。だが上記の二つの小説はそれらと一線を画する。これらには静けさという同じ特徴がある。「静けさ」とは「正しい宗教の信者であり、他者をいたわる心の余裕を忘れない、どんな非情な運命もありのままに受け入れる」という「信仰深い、平和な民のところにのみ生まれる精神の静けさ」という意味である。その「かつての日本人にもあった」静けさに、戦争に巻き込まれる市民の苦しみ、「国家のエゴ」で社会的弱者を破滅させる恐るべき現実が、痛切に映しだされる。だがまさにそれが、物語を再読に耐える文学として成り立たせ、我々日本人に、イスラムの神を信ずる人びとに対して、人間的な感情を呼び覚ますのである。

『白い紙／サラーム』（シリル・ネザマフィ作 文藝春秋）

ーあらすじー

『白い紙』——「わたし」はイランの女子高校生。首都テヘランに住んでいたが、隣国のイラクと戦争が始まってから、この人口2万に満たない小さな田舎町に母親と2人で引っ越してきた。父は医者で、今、戦争医師として最前線に一番近い隣町の大きな病院に派遣されていて、週に一度、私たち家族のいる家に帰ってくる。けれども父親はそんなにゆっくりとしてられない。村人たちが「病気を診てほしい」と家にやってくるからだ。同じ教室で授業を受けているハサンという男の子も病気の母親を連れて家にやってくる。ハサンの父親は大工なのだが、今は兵士として首都を守っている。ハサンは村一番の秀才で、医大に進学して医者になる夢がある。もうすぐ大学受験だ。学校の先生は「今、君たちの人生は『白い紙』だ。どのような人生を送るか、つまり『白い紙に何を書くか』は君たち次第だ」と熱く訴える。長引く戦争で将来に自信が持てない子どもたちを励ますかのように……。イスラムの掟では結婚していない男女が外で会うのは厳禁である。けれども「わたし」はハサンとモスク（イスラム教の寺院）で逢瀬をかさねる。大学受験が終わるが、折りしもイラク軍の首都攻撃が激しくなり、そしてハサンの家族が村にいられなくなるような事件が起る。テヘランの医大に無事合格したハサンだが、彼は義勇兵公募の白い紙に自分の名前を書き込むのだった……。

『サラーム』——「私」はアラビア語圏の国から来た、日本の大学に通っている女子大生。高額のパイト料に魅せられてダリ語の通訳を引き受ける。通訳の相手は入国管理局に収容されている、アフガニスタンからやってきた少女レイラ。日本では入国して60日以内に難民の申請をしなければ不法滞在となり、もと来た国に強制送還されてしまう。弁護士の田中先生は「レイラに対して、政府の強制送還をやめさせよう」と裁判に訴え、勝訴するためにレイラ本人から彼女に有利な情報をできるだけ多く得ようと奮闘する。最初の面談ではまったく無表情な目をしていて自分の家族についてほとんど語らなかつたレイラだが、面談の回数を重ねるたびに心をひらいて自分の家族について話しはじめ、半年もの月日を経て、ようやく自分の父親のことを告げる。レイラの父親はタリバンと抗戦している、アフガニスタンで有名なハザラ族の司令官だった。そして身に隠していた、その写真と抵抗軍のメンバーカードも私たちに見せてくれた。

難民救援活動のボランティア団体が保証人となり、レイラは入国管理局から仮釈放されて、その団体が運営する教会に引き取られた。次第にレイラの表情にも笑顔が見られるようになる。しかし田中先生の調査により、彼女の父親は既に殺されているとわかる。号泣するレイラ。そして9・11テロが起り、「アフガニスタン人がテロを起こした」という理由、ただそれだけでレイラは日本国外退去・アフガンへ強制送還になる。飛行場で彼女は私たちに「サラーム（あなたたちに平和を）」と告げるのだった。